

令和元年十二月十日発行  
皇學館論叢第五十二卷第六号 抜刷

研究ノート

『古言梯』の受容と展開

——山田常典『増補古言梯標註』について——

兒  
島  
靖  
倫

## 『古言梯』の受容と展開

—— 山田常典『増補古言梯標註』について ——

兒島靖倫

### □ 要 旨

賀茂真淵門下の楳取魚彦が編んだ『古言梯』は、魚彦没後も修訂を繰り返して幕末まで広く流布し、いわゆる歴史の仮名遣いの成立に貢献した。その版本には、村田春海などの国学者の説が、欄外の至る所に確認できる。それらは近世期における語学的知見としての情報を有するので、近現代以前の日本語学史を考えるに際して、『古言梯』は看過できない資料といえよう。

ところが、先行研究が取り上げている『古言梯』は、魚彦自身の手によるものばかりであり、没後の諸本について言及したものは少ない。したがって、『古言梯』の受容に

関しては、検討する余地があるといえる。

そこで本稿は、『古言梯』の諸本を比較検討することにより、いわゆる江戸派の語彙研究における方法の一端を明らかにしたい。具体的には、山田常典が修訂を施した『増補古言梯標註』の形成過程について考察を加える。

### □ キーワード

『古言梯』 山田常典 楳取魚彦 村田春海 清水浜臣  
小山田与清

## 一. はじめに

いわゆる歴史的仮名遣いの成立を取り扱うにおいて、楳取魚彦（一七二三—一七八二）の『古言梯』（明和五年刊）を除外して考えることはできない<sup>1)</sup>。というのも、『古言梯』は仮名遣いの歴史を議論するにおいて、契沖（一六四〇—一七〇一）の『和字正濫鈔』（元禄八年刊）と共に、必ずといってよいほど取り上げられる辞書だからである<sup>2)</sup>。

その『古言梯』について、かつて『言海』における「もちある」に見られる近世国学の影響を、「凡例」（卅四）にある諸文献に即して調査した際に言及したことがある<sup>3)</sup>。すなわち、『言海』の「凡例」（卅四）に見られる『古言梯』に焦点を当てると、そこには「村田春海云……」とあるが、これは『古言梯』の〈初版本〉（再考本）以降の諸本に見られる頭注で、書名は『古言梯』と表記しながら、実際の引用は〈初版本〉（再考本）以降の諸本のいずれかであるという点である。

これまで『古言梯』については、岡田希雄（一九三七 a・一九三七 b・一九四二）が言及して以後、林義雄（一九七九 a・一九七九 b・一九八一・一九八五・一九八六・一九八七・一九八九）や三澤成博（一九八一）や福島邦道（一九九〇）らが、『古言梯』

の成立および受容に関して指摘している。一方で、『古言梯』に収録されている語彙や仮名に関しては、永山勇（一九六七 a・一九六七 b）以降に見られなかったが、最近になって内田宗一（二〇〇六・二〇一〇）や今野真二（二〇一六 a・二〇一六 b・二〇一六 c）が論じている。ただ、これらの研究は、『古言梯』の〈初版本〉から〈再考本〉へと至る過程を追ってはいくけれども、『古言梯』が与えた周辺および後発の作品への影響については、ほとんど言及されていない。

この課題を解決するためには、『古言梯』の姿を正確に把握する必要があると考える。すなわち、記述内容に着目して各々の諸本を比較し、それぞれの性格を理解する必要があるといえる。そこで本稿では、『古言梯』の諸本のうち、山田常典（一八〇八一—一八六三）が修訂した『増補古言梯標註』を論じ、『古言梯』の受容と展開について述べる。なお、本稿では便宜を図って『増補古言梯標註』を〈常典本〉と呼ぶ。

## 二. 「常典本」の概要

山田常典は、いわゆる江戸派の学統に属する国学者である<sup>4)</sup>。名は一般に「ツネノリ」と呼ぶようであるが、別称で「常介」とも「常助」ともされることがあり、「典」は「スケ」とも読

むことを考慮すれば、「常典」で「ツネスケ」と呼んでも差し支えないであろう。<sup>(5)</sup>

常典が刊行した〈常典本〉について、先行研究は一体どのように言及しているのか。〈常典本〉については管見の限り、岡田希雄（一九三七a）と山田孝雄（一九二九）と木枝増一（一九三三）と福島邦道（一九九〇）と今野真二（二〇一六a）以外、ほとんど触れられていない。これらはいずれも次の四点について述べている。

①表紙の見返しの「弘化四丁未春發兌／増補古言梯標注 全／東都書肆 青雲堂梓」から、弘化四（二八四七）年 ⑥  
に出版されたものであること。

②本文の末尾の頭注に「この人々の後みる／にしたがひ聞くに／まかせてかしらに／も本文にもかき／そへぬるは」とあることから、村田春海（二七四六一―八一二）の説を清水浜臣（一一七七六一―八二四）が随所に取り入れた『古言梯再考増補標註』（文政三年刊）の増補版であること。<sup>(7)</sup>

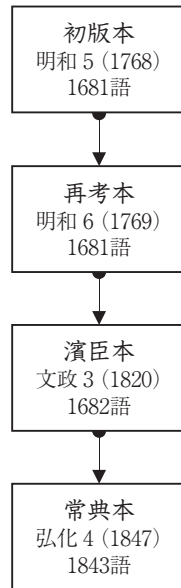
③「附言」（三ウ）の頭注に「今所補凡百五十言」とあるので、『古言梯再考増補標註』から増補された語彙は約一五〇語であること。

④初版本が刊行されて以来、五十音図で「お」がワ行に

『古言梯』の受容と展開（兒島）

「を」がア行に配置されていたが、それらの位置を修正したこと。<sup>(8)</sup>

以上が〈常典本〉における現時点で明確になっていることである。これに基づいて図式化すると次のようになる。なお、以下では便宜を図って『古言梯再考増補標註』を〈濱臣本〉と呼ぶ。



先述したように、これまでの『古言梯』研究は、〈初版本〉から〈再考本〉へと至る過程を追っているものであった。これは編者である魚彦の手になるものであるから、従来の『古言梯』は、「どのように編纂されたのか」という観点から研究されてきた観がある。一方で〈濱臣本〉と〈常典本〉のように、編者である魚彦没後の『古言梯』は、紹介程度に言及されているのみであった。すなわち、「魚彦没後に『古言梯』はどのように受容されたのか」という観点からは、研究されてこなかったと考えられる。

そこで以下においては、先行研究が等閑視してきた『古言梯』

表1：「春云」の対象語

45	を (六十四オ)	1	あへぎ (二オ)
41	やむを・やむめ (五十七オ)	5	あな・ひ (三オ)
37	まなこゝる (五十二ウ)	9	いぶかる (八ウ)
33	ねちげびと (四十五オ)	13	うづくまる (十二オ)
29	とのい (四十一オ)	17	かづく (二十一ウ)
25	しひる (三十二オ)	21	くもぬ (二十六オ)
21	しひる (三十二オ)	25	しひる (三十二オ)
17	かづく (二十一ウ)	29	とのい (四十一オ)
13	うづくまる (十二オ)	33	ねちげびと (四十五オ)
9	いぶかる (八ウ)	37	まなこゝる (五十二ウ)
5	あな・ひ (三オ)	41	やむを・やむめ (五十七オ)
1	あへぎ (二オ)	45	を (六十四オ)
2	あゆち (二ウ)	46	をふと (六十四ウ)
6	いそ (四ウ)	42	やをら (五十七ウ)
10	いらつめ (九オ)	38	みさを (五十三ウ)
14	およな (十四ウ)	34	ひじり (四十八ウ)
18	かをる (二十一ウ)	30	とほつあふみ (四十一ウ)
22	こはし (二十八ウ)	26	すなほ (三十三ウ)
26	すなほ (三十三ウ)	22	こはし (二十八ウ)
30	とほつあふみ (四十一ウ)	18	かをる (二十一ウ)
34	ひじり (四十八ウ)	14	およな (十四ウ)
38	みさを (五十三ウ)	10	いらつめ (九オ)
42	やをら (五十七ウ)	6	いそ (四ウ)
46	をふと (六十四ウ)	2	あゆち (二ウ)
47	をかし (六十五オ)	3	あゑか (二ウ)
43	よほろ (五十九ウ)	7	いひの (七オ)
39	むじな (五十五オ)	11	うま・うめ (十ウ)
35	ひ・な (四十八ウ)	15	および (十五オ)
31	なづ (四十二オ)	19	かくのあわ (二十四オ)
27	そほづ (三十五オ)	23	こほろぎ (二十九オ)
23	こほろぎ (二十九オ)	27	そほづ (三十五オ)
19	かくのあわ (二十四オ)	31	なづ (四十二オ)
15	および (十五オ)	35	ひ・な (四十八ウ)
11	うま・うめ (十ウ)	39	むじな (五十五オ)
7	いひの (七オ)	43	よほろ (五十九ウ)
3	あゑか (二ウ)	47	をかし (六十五オ)
4	あひおい (二ウ)	44	ゑらぎ (六十三ウ)
8	いそしき (八オ)	40	もちぬ (五十六オ)
12	うべ (十ウ)	36	ひとしほ (四十九オ)
16	おむなづら (十九ウ)	32	ぬ (四十四ウ)
20	き (二十四ウ)	28	たいまつ (三十六ウ)
24	しづ (三十二オ)	24	しづ (三十二オ)

の受容と展開という観点から、(常典本)を見てゆくことにす。具体的には(常典本)の頭注に注目して述べる。

三、村田春海の説について

村田春海は賀茂真淵門下の国学者で、同門の加藤千蔭(一七三五一—一八〇八)と共に江戸派の双壁をなし、和歌・和文を表したとされる。辞書史上においては、『新撰字鏡』(享和本)を発見・紹介したことで知られる。

春海は仮名遣いに関心が深く、著書に『仮字拾要』(寛政十

年刊)、『仮字弁義』(享和元年刊)、『仮字考証』(享和元年刊)、『仮字大意抄』(文化四年刊)がある。注目すべきは、いずれも『古言梯』が関係しているということである。したがって、『古言梯』を考えるに際して、春海の仮名遣い研究を看過することはできないと思われる。ましてや(常典本)は、春海の説を随所に取り入れた(濱臣本)が原本であるから、これについて検討する。

さて、春海の説は拙稿(二〇一八)でも指摘したように、頭注に「春云」とあるものが該当する。これが(常典本)に四十七条ある(表1)。

### 三・一・春海の補足について

まず「あゆち」(二ウ)という語に関して、本文と頭注を見  
てみる。

〔本文〕尾張郡也。〔紀吾湯市〕〔紀年魚市と有。〕〔和伊伊知、

これらのいは平言也。愛智

〔頭注〕春云、由と以と通ずるより轉じたる也。

「あゆち」は今の「あいち」のことである。春海は「由と以と通ずる」と述べるが、これはいわゆる五音相通に基づいて、「ゆ」と「い」が転化したことを説明している。これは本文にない説明で、「これらのいは平言也」という説明を補強していることになる。このような例は、他に「あゑか」「あひおい」「あな、ひ」「いそ」「うま」「うべ」「おむなかつら」「かづく」「かくのあわ」「き」「くもゑ」「こほろぎ」「すなほ」「ひじり」「ひな」「みさを」「もちゑ」「よほろ」「ゑらぎ」「をふと」「をかし」が該当し、全部で二十二条ある。

### 三・二・春海の訂正について

次に「いひの」(七オ)という語の本文と頭注を見てみる。

〔本文〕安藝郷也。〔和伊比乃入農農、古は奴の假字也。

乃に用るは後の訛。

〔頭注〕春云、農と乃の假字に用るは通音也。後のことなれど訛にはあらず。

本文に「農、古は奴の假字也。乃に用るは後の訛」とあって、それを春海は「農と乃の假字に用るは通音」であって「訛にはあらず」と訂正しているのである。このような例は、他に「いそしき」「いぶかる」「いらつめ」「うづくまる」「およな」「および」「かをる」「こはし」「しづ」「しひる」「そほづ」「たいまつ」「とのい」「とほつあふみ」「なづ」「ぬ」「ねぢげびと」「ひとしほ」「まなこゑ」「むじな」「やむを」「やをら」「を」が該当し、全部で二十五条ある。

### 四・清水浜臣の説について

清水浜臣は春海門下の国学者で、真淵の孫弟子にあたり、常典の師匠でもある。古典の考証を行うと共に江戸の歌壇に重きをなしたほか、真淵一門の人々の著作を編集出版するなど、江戸派の学統を伝えたという。

浜臣の説は頭注に「濱云」とあるものが該当する。これが〈常典本〉に十四条ある(表2)。その内訳は、①補足したものが八条、②訂正したものが六条である。

表2：「濱云」の  
対象語

13 をかす (六十五オ)	14 をかし (六十五オ)	12 ゑのこ (六十三オ)
10 みざり (六十二ウ)	11 みちごまめ (六十二ウ)	9 わざをぎ (六十一ウ)
7 ねぶる (四十五オ)	8 むべ (五十五オ)	6 たふげ (三十六オ)
4 おごり (十五ウ)	5 かい (二十ウ)	3 うづくまる (十二オ)
1 あへぎ (二オ)	2 あな、ひ (三オ)	

四・一・浜臣の補足について

たとえば「おごり」(十五ウ)の場合、

〔本文〕 大ぼこりの意なるべし。奢

〔頭注〕 濱云、古本今昔物語語卷廿二下 誇りホコたる心にて又誇りの餘云々。

とあるので、①「補足したもの」に該当する。本文に「大ぼこりの意なるべし」とあるので、典拠を出して説を補強しているのである。このような例は、他に「あへぎ」「あな、ひ」「うづくまる」「むべ」「わざをぎ」「みざり」「をかし」が該当する。

その中には、春海の説を補足したものもある。たとえば「うづくまる」(十二オ)という語を対象としたものを見ると、

〔本文〕 宇豆は紀禹豆麻佐祝宇豆乃幣帛など云宇豆に同。

〔古今本〕 宇須受麻里とあるは誤字也。躡

〔頭注〕 濱云、うづくまるの證たしかならず。宇豆麻佐宇

豆の幣帛は證となしがたからん。おのれは古事記

にしたがひて宇須受麻里とか、まくおぼゆ。外にも證あるべし。

春云、宇須受麻里は誤字にあらず。須と豆と通ずる事古言に例多し。

とある。つまり、春海が「宇須受麻里は誤字にあらず」と述べたことに対し、浜臣は『古事記』を典拠に「宇須受麻里」が誤字でないことを補強しているのである。このような例は、他に「むべ」「わざをぎ」「みざり」が該当し、全部で四条ある。

四・二・浜臣の訂正について

たとえば「みちごまめ」(六十二ウ)の場合、

〔本文〕 豆也。和爲知古宋米。珂字豆

〔頭注〕 濱云、和名抄によりて載たれど、こは誤也。畧本

和名抄に伊知古万米と有をよしとすべし。覆盆子に似たるより名づけし也。これのみならず、印本

和名抄に誤字多し。心してみるべし。さて、此語はこゝをば削て以部にいちごまめとて出すべし。

とあるので、②「訂正したもの」に該当する。つまり、見出し語とした「ぬちごまめ」は間違いで、「いちごまめ」が正しいというのである。その根拠として、浜臣は「覆盆子に似たる」と述べるが、以部には「いちご」(五ウ)が立項されている。このような例は、他に「かい」「たふげ」「ねぶる」「ゑのこ」を「かす」が該当し、全部で六条ある。ちなみに、春海の説を訂正したものは一つもない。

### 五 小山田与清の説について

岡田希雄(一九三七a)は〈常典本〉について、常典以外の説に「田中道麿云」<sup>三オ</sup>「宣長云」<sup>五四ウ</sup>「本居氏」<sup>六五ウ</sup>「屋代弘賢云」<sup>四六オ</sup>「與云」<sup>十五條</sup>の如きがある」(三十頁)ことに触れ

ており、とりわけ「與云」について次のように述べる(同頁)。

與某——或ひは何與であるかも知れないが——と云ふやうな學者と云ふと、先づ高田與清を思ひ出すのが普通である上に、與清は増補標註本の春海の門人として濱臣と同門であり、江戸の假字遣派を代表する春海門の學者であり、假字遣の方に縁故が無いとも云へない人である事を思ふと、此の「與」は與清の事であると見て可いかと想像する。

ここにいう「高田與清」が小山田与清(一七八三—一八四七)のことである。すなわち、常典と同じ学統に属する。

さて、その「与云」の注であるが、岡田希雄(一九三七a)が指摘するように十五条ある(表3)<sup>13</sup>。が、この頭注それ自体について、岡田希雄(一九三七a)は一切言及していない。その内訳は、①春海・浜臣等の説を補足・訂正したものが四条、②単に出典のみ挙げたものが五条、③出典を挙げながら説明を施したものが六条である。

表3:「与云」の対象語

13は(四十六オ)	14も(五十六オ)	15もむのふ(五十六ウ)
1 あがふ(二オ)	2 あちきなし(三ウ)	3 いらす(五ウ)
4 いそしき(八オ)	5 いさかひ(八ウ)	6 いなおふせどり(十オ)
7 うまはず(十一ウ)	8 うるはし(十一ウ)	9 および(十五オ)
10 たふげ(三十六オ)	11 たふとし(三十七オ)	12 とじ(四十ウ)



五・一・春海・浜臣等の説の補足・訂正について

たとえば「いそしき」(八才)の場合は、

〔本文〕和伊蘇思〔續紀〕文徳実録同いさほしも佐保の約

曾にて同。功勲

〔頭注〕春云、類聚国史 伊佐乎之久 日本紀竟宴哥 伊佐

袁志久又夷装鳴とのみもあり。後世いさをしといひて體語とするは誤也。しははたらかし云辭にて伊佐乎といふぞ本語なる。

与云、竟宴哥に夷装鳴と有は勲功の意に非ず。勇

雄の義也。是、本語にて勲功の事にも勇雄イサヲし共勇

雄しく共いひ約てイソシイソシクイソシクなどいへり。

されば功字の心をイサヲとは云べからず。イサヲ

シクイソシクイソシなど云べし。続日本紀に勲

臣をイソシノオミといへることも有。イサヲとい

へば必勇雄の心也。イサヲシクは勇雄らしく也。

○宇津保物語後蔭卷に云、いたゞき天につきてさかしき山はるかにみゆ。としかげいさをしき心はやきあしを出して行に云々。是勇雄らしき心を出したる也。いかでか勲功らしき心を出したりとせん。

とあるので、①「春海・浜臣等の説を補足・訂正したもの」に

該当する。春海が『日本紀竟宴哥』の「夷装鳴」を引いている

ことに對し、与清は「勲功の意」はないとして、『続日本紀』などの他の文献から「いそしき」の例を挙げているのである。このような例は、他に「および」「たふげ」「は」が該当する。

五・二・出典のみの注について

たとえば「あがふ」(二才)の場合は、

〔本文〕和安賀布〔字同〕贖

〔頭注〕与云、贖〔靈異記〕阿加女司

とあるので、②「単に出典のみ挙げたもの」に該当する。これは『日本靈異記』に「阿加女司」という表記があることを示している。すなわち、本文に挙げられている『和名類聚抄』と『新撰字鏡』以外の文献に、「あがふ」の用例があることを補足しているのである。換言すれば、出典の増補である。このような例は、他に「あちきなし」「いなおふせどり」「うるはし」「たふとし」が該当する。

五・三・出典を挙げながら説明を施した注について

たとえば「いさかひ」(八ウ)の場合は、

〔本文〕紀伊須呂許比とあり。呂と良通須良の約佐也。

加と許又かよふ。諺

〔頭注〕 与云、俊頼口伝廿五段にうらなくていそにみるめはかりもせよいさかひをさへひろふべしやはと云哥有。こは貝をひろふとそへたり。いさは否の義也。清てよむべし。

とあるので、③「出典を挙げながら説明を施したもの」に該当する。「俊頼口伝」は一般に『俊頼髓脳』と呼ばれる歌学書で、それを典拠にして説明を加えている。このような例は、他に「いらす」「うまはず」とじ「も」「もむのふ」が該当する。

以上の検討から、与清の注は必ず出典を伴っている。与清は生前、自分の著作に孫引きがないことを何よりも自慢していた<sup>15</sup>。〈常典本〉に見られる頭注の内容は、与清の古典研究に対する厳格な姿勢の表れといえろと考えられる。

## 六、山田常典の説について

ここまで〈常典本〉における頭注の種類について、春海・浜

臣・与清の三人を取り上げて検討して来たが、当然ながら常典自身の説も存する。頭注に「典云」とあるものであるが、先述の三人に比して十一条しかない(表4)<sup>16</sup>。しかし、当時の国語学的知見として看過できない情報を有すると考えられる。

### 六・一、常典の補足について

まず「いる」(五オ)という語であるが、

〔本文〕<sup>和</sup>和伊加鑄鐵ヲ形也。鑄

〔頭注〕 典云、赤染集三ある寺にかねいしがいみじうおそろしげに見えしを 後の世をかねてみるこそかなしけれかゝるほのほにいるにや有らん。是は入に鑄を添たり。

とある。「赤染集」は一般に『赤染衛門集』と呼ばれる家集のことで、その一首を引用して補足しているのである。このような例は、他に「いなむ」「おに」「かのえ」「ねずみ」が該当し、全部で五条ある。

表4:「典云」の  
対象語

10 にふ (四十三ウ)	11 ねずみ (四十五オ)	
7 かのえ (二十二オ)	8 こひ (二十八オ)	9 なにしおふ (四十三オ)
4 おに (十四オ)	5 おしね (十六オ)	6 かひ (二十ウ)
1 いる (五オ)	2 いなむ (六ウ)	3 いなおふせどり (十オ)

六・二、常典の訂正について

たとえば「かひ」(廿ウ)について、

〔本文〕物と物を易也。〔新万〕加比の辞に借用〔字〕加布 買

〔頭注〕典云、貿易語の本は一つ意なるべけれど、買は

かはん かひ かふと活用し、易はかへん かへ か

ふ かふる かふれ かはらひ かはらふなど活用

す。三言かはるの条合せこ、ろうべし。

とある。今日の用語でいえば、「買ふ」は四段活用であり、「易

ふ」は下二段活用である。本文の「物と物を易也」は〈初版本〉

以来、全く手が増えられていない説明で、現代においても「買

ふ」と「易ふ」は同語として扱っているが、常典は活用に相違

があることから別語としているのである。ちなみに、頭注の末

尾の「三言かはるの条」には、見出しに「かはるかふる」とあ

ることから、活用の補助的説明として挙げたものと考えられる。

これと類似したものとしては、「こひ」(恋、廿八才)と「こ

ひ」(乞、同)がある。前者の語彙は、

人を慕まも也。〔古〕古斐 〔紀〕万同 戀

とあり、後者の語彙は、

物を求也。〔祝〕乞乞 乞

とあって、各々に共通する頭注として常典は次のように述べる。

典云、恋はこひん こひ こふ こふる と活用し、乞はこ

はん こひ こふ と活用する也。

すなわち、「恋ふ」は上二段活用であり、「乞ふ」は四段活用で

ある。各々の見出しを確認すると、「こひ」(恋)は「こひこふる」

とあり、「こひ」(乞)は「こひこふる」とある。これらも〈初

版本〉以来、全く手が増えられていないが、常典は頭注にて訂

正しているのである。常典が修正したのは「乞ふ」のみである

が、前述の「買ふ」と「易ふ」と同様、活用の相違について述

べている。

さて、これらの他は「いなおほせどり」「おしね」「なにしお

ふ」「にふ」が該当し、全部で六条あるが、活用についての見

解を述べたものは、右に挙げた三語の頭注のみである。しか

し、活用の相違について述べる頭注は、春海も浜臣も与清もな

い。このことを考慮すれば、従来の『古言梯』になかった文法

に関する説明が、常典によって追加されたことになる。

七、おわりに

以上の検討から、〈常典本〉は江戸派における語彙研究の集

大成ともいえるべき辞書体資料である。すなわち、江戸派の国学

者の説を受容しつつ、初版本の刊行から約八〇年の歳月を経て

展開し、『古言梯』は完成形ともいえるものになったわけであ

る。そのような意味において、たとえば白石良夫（二〇〇八）の「この弘化版は、版を彫り替えたといつても、改訂増補の部分はやはり欄外にあり、魚彦説はのこり、内容は文政版とおなじである」（九四頁）という指摘は、早計と言わざるを得ないであろう。

ところで、今回は『古言梯』の受容史に関する一つの考察であるが、たとえば小山田与清の説に關して、多少の問題がある。そもそも「与云」の注は、どれも〈濱臣本〉にないものであるから、常典が増補するにあたり、与清の本を参照した可能性が考えられる。岡田希雄（一九三七a）は「紀淑雄氏の「小山田與清」を見ると、假字遣關係の書のあつた事は説いて居ないが「古言補正」を録して居る。或ひは「古言梯補正」と云ふやうな書が誤記せられて居るのではあるまいか」（三十頁）と推測している。これは今後の課題としたい。

### 【注】

(1) 『古言梯』の刊行年については、一般に「明和二年」とされている。赤堀又次郎（一九〇二）などにその旨の記述が確認できるが、伊藤慎吾（一九二八）は刊行年を「明和八年」と断言している。これに対して岡田希雄（一九四二）は、賀茂真淵の書簡に見える『古言梯』に關係する記事を

『古言梯』の受容と展開（兒島）

根拠に、刊行年を「明和五年十二月頃か、又は翌六年正月の開版完成であらう」（二六頁）と推定した。これを踏まえて林義雄（一九七九a）は、①明和五年九月二十七日に古言梯の売出しが許可された時点ですでに板本は完成していたと思われること、②明和五年十一月十七日に古言梯竟宴が行われた時の竟宴歌に版本出来を思わせるものがあること、を根拠に「古言梯は真淵の指導を受けて成立し、明和五年十一月頃に開版されたものと思われる」（七九七頁）とし、「明和元年八月に成立した本書の刊行が遅れたのは、著者が当時発見された新撰字鏡などの新資料の存在を知って、成稿後さらに項目や証例の増補を行ったことによるのである」（同頁）とした。本稿は以上の点を踏まえて、刊行年を「明和五年」とする。細かな点は今後の研究を俟たねばならないであろう。

(2) たとえば、山田孝雄（一九二九）や木枝増一（一九三三）や白石良夫（二〇〇八）などがある。いずれも「歴史的仮名遣の確立に貢献した」という部分が強調されており、「契沖の『和字正濫鈔』における不備を補足した」ことを指摘する。なお、『古言梯』を辞書でなく用例集とする意見もあるが、『古言梯』に先行して『蜷縮涼鼓集』（元禄八年刊）や『冠辞考』（宝曆七年刊）などの例があるように、用例

集が辞書体を採用するのは必然である。そのような意味において、用例集も辞書であるから、『古言梯』の組織は辞書史上で注意するに足るものといえる。

(3) 拙稿(二〇一八)参照。

- (4) 常典の学統については、大川茂雄・南茂樹共編(一九〇四)に「江戸人、村田春海門、一作『濱臣』」(七七九頁)とあり、関書院編輯部(一九三三)に「村田春海の門」(二九八頁)とあって、いずれも春海門下であることが記されている。しかし、そもそも春海は文化八(一八一二)年に没しており、その当時の常典は三歳であるから、師弟関係が成り立たない。したがって、常典は春海の弟子の浜臣門下である。すなわち、春海の孫弟子というのが正確であろう。なお、國學院大學日本文化研究所編(一九九二)には、「村田春門」「本間遊清」「海野遊翁」の名が挙げられている。
- (5) 福島邦道(一九九〇)参照。ちなみに、「典」を「スケ」と読む例としては、「典書」を「ふんのすけ」と呼び、「典侍」を「ないしのすけ」と呼ぶなどがある。
- (6) 岡田希雄(一九三七a)は「これを亀田氏の国語学書目解題は「弘化三年」刊と云つて居るが或ひは誤りではあるまいか」(三二頁)と述べる。「亀田氏の国語学書目解題」とは、亀田次郎(一九三三)のことである。馬淵和夫・出

雲朝子(一九九九)も〈常典本〉の刊行年を「弘化三年」としている。この「弘化三年」については、本文の末尾の頭注に「弘化三年丙午春／山田常典」とあるので、〈常典本〉の成立年と考えられる。

- (7) 木枝増一(一九三三)は「増補標註古言梯」と呼んでおり、これは今野真一(二〇二六a)も使用している。しかし、底本は〈再考本〉であり、『増補古言梯標註』との差別化を図るならば、『増補標註古言梯』よりも『古言梯再考増補標註』と呼ぶのが適当であろう。

- (8) 五十音図における「お」と「を」の位置については、五十音図の頭注に「原本古言梯はお／をの所属を誤れり今これをあらたむ」とあることから知り得るが、林義雄(一九七九b)は「版本では、藤重匹竜が文化五年(一八〇八)に刊行した、縮刷本の『掌中古言梯』においてはじめて改められた」(二八八頁)と指摘している。実際に『掌中古言梯』の五十音図を確認すると、「お」がア行に「を」がワ行に配置されていることから、『古言梯』における五十音図の修正は〈常典本〉が最初ではないことになる。しかし、『掌中古言梯』よりも〈常典本〉が流布した点を考慮すれば、〈常典本〉が貢献したことになる。

- (9) 林義雄(一九七九b)によると、「宝暦十三年の春に、

田安家の命を受けた真淵が、村田春郷・春海兄弟を具して、山城・大和・伊勢地方を巡遊した際に、京都寺町五条の書肆天王寺屋において新撰字鏡の写本を発見し、春海に購入させて以来のことである」(一八五頁)という。

(10) 田中康二(二〇〇〇)によると、春海が『古言梯』を高く評価するのは、「縣門の先輩が執筆した書物であり、契沖の実証的方法を受け継ぐ客観的な手続きを踏まえている」(三四五頁)こと、「この書物が『新撰字鏡』を有力な証例としている」(三四六頁)ことであるという。そして、「契沖や魚彦からその精神を受け継ぎ、仮名遣い確定法を理論化した」(三五八頁)ことで、「春海は先達から受けたバトンを確かに後進に渡したのである」(三五九頁)と指摘する。

(11) ただし、次の十九語は、春海の説であるにもかかわらず「春云」がない。

「あじろ」(一ウ)「あわて」(二オ)「あつかひ」(三ウ)「うゑ」(十ウ)「しわ」(三十二オ)「しはす」(三十二ウ)「すまひ」(三十三ウ)「そ」(三十四ウ)「そなふ」(三十五オ)「たづき」(三十六オ)「つ」(三十八ウ)「ともゑ」(四十一オ)「はひ」(四十六オ)「ま」(五十一ウ)「まじなひ」(五十二ウ)「みそぢ」(五十四オ)「ゆくへ」(五

十八ウ)「よぢ」(五十九ウ)「をそ」(六十四オ)

(12) これらのうち「おむなかつら」(十九オ)については、

〔本文〕 草也。和於無奈加豆良 芎藭

〔頭注〕 春云、嫗蔓ならんと云はよし。さるをおよなの条の説とたがへるは何事ぞや。

とある。広い意味で捉えると、これも補足に分類できよう。というのも、実際に「およな」(十四ウ)を確認すると、

〔本文〕 老女也。万オヨシ意奈斯は老してふ言也。しかれば老女はおよなと云べし。和嫗を於無奈、

無は與の誤か。

〔頭注〕 春云、老と於与と云ことはあれど於与奈と云

事はなし。嫗を統紀に音那とも有。又古き物

語に老女のことを於無奈といへること多し。

和名抄の無を與の誤にして於與奈也と云は跡

かたもなき強言也。

とあり、本文の「無は與の誤か」に対して「跡かたもなき強言也」と断じていることから、「およな」は訂正に分類でき、「おむなかつら」の注は「およな」の補助的説明であるといえるからである。

(13) 本文を見ると、「えしもの」(十三ウ)という語に、

常陸風土記荒賊俗阿良夫流要斯母乃賊与云、

『古言梯』の受容と展開(兒島)

物語書に、えせこと、えせもの、えせわざ、えせふ。えせは、此えしにおなじ。

とあるので、正確には全部で十六条ある。岡田希雄（一九三七 a）の指摘は、あくまで頭注に限定したものである。このことには注意すべきであろう。

(14) ただし、「うまはず」（十一ウ）という語については、  
与云、以部の標注にいへる如くにてうまはずは利を得る事をいへる語也。

とあるように、何かしらの出典を伴っていない。しかし、与清の指摘するとおりに「以部の標注」を見ると、「いらす」（五ウ）についての注に、

与云、靈異記に作り酒ヨラケ息利イシラハスと見ゆ。作酒を業として其利を得て活計ヨラケとするを云也。さてイラシはいらふに同じく其利に安んずるよし也。

とあるので、広義に解釈すれば「うまはず」の注もまた、出典を伴っていることになろう。

(15) 『松屋筆記』の「例言」に「此筆記は、廣く群籍を涉獵し、適意の箇所を拔萃し、考を加へ、案を施し、多くの例證を挙げて説明し、其引用するところの各原書には、巻数丁数を附して出所を明にし、孫引の如きは極めて少し」（小山田与清著・市島謙吉編（一九〇八）二頁）とある。この「例

言」は与清自身によるものではないが、孫引を避けて引用する書籍そのものにあたるという与清の姿勢は、後世の人からも指摘されるほどのものであったことが、この記述から窺える。また、孫引に関しては与清自身も『擁書漫筆』に、

書肆がいらでけるに、一則書はつれば筆耕人にうばひさられて、そが中ひがことしつとおほしきは書なほしてんと、わらはをはしらせとはすれば、はやゆくへもしらぬかたの割鬮氏が家にもてさりぬなどいらへて、くゆれどもおふべからぬことおほかれれば、ふたたびうがへただすにたよりなし。されば引もらしの説はさらにもいはず、引おくれの説だにはかりがたし。ただ孫引のひとふしもなきのみぞ、おのれがまごころをあかすにはありける。

と記している（本稿は『日本随筆大成』第一期十二巻、四六四頁）を使用、傍線部は引用者による）。

(16) 岡田希雄（一九三七 a）は「僅か十二条程しか見えない」（三〇頁）と述べるが、これは「附言」（六オ）にある「典云、此標註の説いかゞにや。しか唱ると云も、誤にはあるべからず。猶、以部の頭に云」を含めているからである。

【使用テキスト】

■ 山田常典『増補古言梯標註』（弘化四年四月）

※変体仮名は全て普通仮名に改めて表記し、適宜において句読点を付した。

【参考文献】

■ 赤堀又次郎（一九〇二）『国語学書目解題』吉川半七

■ 伊藤慎吾（一九二八）『近世国語学史』立川文明堂

■ 内田宗一（二〇〇六）『古言梯』の仮名字体―訓仮名出自字体の忌避をめぐる―『国語文字史の研究』九、和泉書院

■ 内田宗一（二〇一〇）『賀茂真淵著作における仮名字体使用に関する考察―訓仮名出自字体の忌避をめぐる―』『語文』第九二・九三号、大阪大学

■ 馬淵和夫・出雲朝子（一九九九）『国語学史―日本人の言語研究の歴史―』笠間書院

■ 大川茂雄・南茂樹共編（一九〇四）『国学者伝記集成』大日本図書

■ 岡田希雄（一九三七a）『古言梯版種攷・上』『立命館文學』第四卷七號

■ 岡田希雄（一九三七b）『古言梯版種攷・下』『立命館文學』

第四卷八號

■ 岡田希雄（一九四二）『古言梯の開版期に就いて』『國語國文』第十二卷四號

■ 小山田与清著・市島謙吉編（一九〇八）『松屋筆記』国書刊行会

■ 亀田次郎（一九三三）『國語學書目解題』『國語科學講座』第三、明治書院

■ 関書院編輯部（一九三二）『国学者著述一覽』関書院

■ 木枝増一（一九三三）『仮名遣研究史』贅精社

■ 國學院大學日本文化研究所編（一九九二）『和学者総覽』汲古書院

■ 兒島靖倫（二〇一八）『言海』の「もちゐる」―大槻文彦と近世国学について―『皇學館論叢』第五十一卷五号

■ 今野真二（二〇一六a）『仮名遣書論攷』和泉書院

■ 今野真二（二〇一六b）『仮名遣書の系譜』『国文学研究』第一七八号

■ 今野真二（二〇一六c）『古言梯』の「精神」『言語教育研究』第八号

■ 白石良夫（二〇〇八）『かなづかい入門』平凡社新書

■ 田中康二（二〇〇〇）『村田春海の研究』汲古書院

■ 永山勇（一九六七a）『契沖から春満・真淵へ―新・仮名



遣観の黎明―』『山形大学紀要』第六卷二号

■ 永山勇（一九六七b）『定家仮名遣から古典的仮名遣へ―  
宣長の場合―』『文学・語学』第四四号、三省堂

■ 林義雄（一九七九a）『古言梯の成立と開版をめぐって―  
『中田祝夫博士功績記念・国語学論集』勉誠社

■ 林義雄（一九七九b）『解説』『古言梯』勉誠社文庫

■ 林義雄（一九八一）『古言梯』仮名遣の実践作品としての  
『久遠万藝』について―解説と翻刻―』『専修国文』第二八  
号

■ 林義雄（一九八五）『古言梯』再考期攷・上』『専修国文』  
第三六号

■ 林義雄（一九八六）『古言梯』再考期攷・下』『専修国文』  
第三八号

■ 林義雄（一九八七）『古言梯』再考本の版種小攷―巻頭五  
十音図の板面に生じた変容をめぐって―』『専修国文』第  
四〇号

■ 林義雄（一九八九）『古言梯』掲出語索引稿』『専修国文』  
第四四号

■ 福島邦道（一九九〇）『古言梯』版種追尋』『実践国文学』  
第三七号

■ 三澤成博（一九八一）『古言梯の版種統紹』『語文』第五一

号、日本大学

■ 山田孝雄（一九二九）『假名遣の歴史』宝文館

〔付記〕本稿は、令和元年度国文学会研究発表会（於 皇學館  
大学、令和元年十月二十六日）にて、『古言梯』の受容  
と展開―山田常典『増補古言梯標註』について―の内  
容を基として、若干の加筆修正を施したものである。席  
上および発表前後において、数多の方々より有益な御教  
示・御指摘を賜った。ここに深く謝意を表します。

〈こじま やすのり・皇學館大学院博士後期課程二年〉